

如来大悲

目が覚めると、ここが何処なのか、今が何時なのか、体も重く頭もぼーっとしてよくわからず、霞がかかったような薄暗い室内を見廻すと、父と母の姿が目に入りました。何やらボソボソと話しているのです。父は「良かった、良かった」と言いながら、寝ている私の頭をそつと撫で、母は「この子は運のよか。生まれてすぐ、危なかつた命が奇跡的に助かつたし、3歳の時は薬のショック症状で死にそうになつたし、今回も心配したけど良かった」という会話が聞こえてきたのです。私はその両親の声でハッと意識が覚めました。ここは病院で、昨日入院して手術をしたのです。

私は小学校に入学して間もない頃、お腹に痛みを感じて、翌日病院で診てもらおうと、即入院。急性虫垂炎でした。もう少し遅かつたら危なかつたそうです。診察室で先生がお腹を触診しながら、「盲腸ですね。すぐ手術」とおっしゃり、私は何がなんだかわからず、その「手術」という言葉がとても恐ろしくて、泣き出してしまったのです。そして手術が終わり、まだ麻酔が抜け切れていない中で耳にした父と母の会話でした。私が7歳までに死にそうになつたのは今回で3回目。初耳だったので驚きました。当時の私には死がどういうことなのか理解できていませんでしたが、でも私の中で何か感じているものはありました。

小学校に入る少し前、近所で火事がありました。家の中は黒い煙が充満し、私は集まっていた近所の人たちの体の間から、玄関の土間に煤で体が黒ずんだ年配の女性が倒れているのを見たのです。既に亡くなっていたそ

うです。私は得体の知れない怖さと不安に襲われていました。記憶にある最初の死です。病室で両親の話を朦朧とした意識の中で聞きながら、その時の感覚がよみがえっていたのでしょう。私は生まれた時から、死は常に傍にあるという事実を知らされたのでした。

それから10歳、兄の友人の事故死。14歳、同級生の母の突然死。16歳、クラスメートの病死。20歳、友人の自死。29歳、幼馴染みの病死。33歳、父の病死。義父、叔父、実兄、従兄弟、従兄弟の子どもの33歳での病死。この土地に来て出会った人たちの多くの死…。誰もが死と共に生まれ生きて死んでいく身だったので。私は死者に向き合うたびに、死別の悲しみ、そして存在の厳肅さと尊敬を感じながら、同時に私の中で漠然とした怖れと不安の感情も巡っていました。死は身の事実であり、自然の摂理であり、いのちの本来であることは理解しているつもりでも、その事実・摂理・本来に背き抗う心から離れられない私がありました。

親鸞聖人は「南無阿弥陀仏」を「正信偈」では「歸命無量壽如来 南無不可思議光」と示されます。「壽と光」です。言い換えれば「いのちはひかり」です。「存在は輝き」です。生も死も輝きです。輝きは照らしてきます。私の背き抗う姿を照らし知らしめてくるのです。そして死には美しさがあります。存在の厳肅さと尊敬の美しさです。私たちの自然の本来の美しさです。それが「仏説無量壽経大經」には、如来浄土の莊嚴の美しさとして表現されています。その美しさには悲しみがあります。美しさに照らされた、本来に背き抗う私たちの悲しみです。本来そのものが悲しんでいるのです。私を超えた私の深い悲しみです。それを「如来大悲」と言います。

海法龍 かいほうりゅう

1957年、熊本県天草市生まれ、大谷大学真宗宗教学科卒業、大谷専修学院卒業、真宗大谷派長原寺(横須賀市)住職、真宗大谷派首都圏教化推進本部委員、著書に、伝達ブックス81『報恩の生活』(真宗本願寺出版)などがある。

